

日本記者クラブ会報

第333号
1997年
(平成9年)
11月10日発行

東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
日本プレスセンタービル 100
©社団法人 日本記者クラブ
電話三五〇三一二七二二(代)

現役記者主体で会見活性化

ディベート形式の採用も

クラブ行事活性化のための三項目の申し合わせは、九月末の理事会で決定され、すでに十月の会報でお知らせしました。

その際、参考にさせていただいた会員各社の編集・報道の各部長



超満員の会見場に入場する董建華香港行政長官
(10・17)

さん方に対するアンケート結果には、クラブ会見が現役記者にとつて有用となるであろう意見や考え方が数多く盛り込まれていました。いずれも活性化には欠かせないもののばかりです。企画委員会としては、今後具体化を図る建設的なご提案であるとして、次のように確認させていただきました。

①会見を司会する企画委員のリーダーシップで、一線の若手記者が主体になるような運営を心がける。場合によっては、最初に現役からの質問を優先する。

②ゲストの人選に当たって

はもっと幅を広げ、政官ばかりでなく、民間人、特に内外の経済人を招くよう心がける。

③テーマによっては、複数のゲストによるディベート形式を採用する。

④出先クラブのあり方が変化の兆しを見せている中で、企業やNGOなど多様化するニュース源に対して、プレスの側が独立した発表の場を保障することは有意義であり、当クラブがこの面で貢献できる余地もあるので、前向きに研究する。

一線記者の皆さんにはまだ違和感が残るかもしれません。しかし、日本記者クラブは、個人会員制をとる他国のナショナル・プレスクラブと異なっており、記者個人ではなく新聞・通信・放送各社が率先して作った独自の制度なのです。したがって、各社の編集・報道幹部が役員に就任し、その維持運営も各社

の責任のもとに行われています。その上で、創立時の規約の大きな特色として、活動にあたっては「ワーキングプレス」を何よりも優先する」と、うたい上げているのです。

当クラブは二年後に創立三十周年を迎えます。それまでに、現役記者の皆さんがより積極的な形で参加できる記者クラブになれるよう努力する考えです。

さて、十月のクラブ行事は、記者会見九件、研究会二件、試写会一回。記者会見では六日の元衆議議員・松野頼三氏のほかは、外国からのVIPラッシュ。六日「シブリアーニ」大司教、九日「エルベ・ド・イツ」大使、十日「チャワリット・タイ」首相、十七日「董建華・香港行政長官」、二十三日「プロディ・イタリア」首相、二十四日「キンケル・ドイツ」外相、三十一日「アスナール・スペイン」首相、ストロエフ・ロシア連邦院議長。いずれも注目を集めた会見でした。

日本記者クラブ賞が例年通り実施されます。応募要領は最終ページをご覧ください。

(専務理事 那部 吉正)

書いた話 書かなかった話

首相の人柄と応対辞令

怒りの池田、黙する田中



今井 琉璃男

勇人首相が参院選
応援のため松山へ
やって来た。池田
総理は尾道市郊外
の広島県忠海町出
身だから、選挙区
向けに大砲をぶつ
放すと期待した。

地元ゆえで代
表質問者にしてく

愛媛新聞に入って四十八年目になつた。地方紙記者をやつて良かったと思うのは、総選挙などで総理・総裁、各党党首連も応援にみえるから、人物鑑定？ができることである。多くの政治家たちと箱のり、船のり、飛行機のり取材や会

見でお目にかかり、短時間ではあったが強烈に「人柄」に接し得た。メモを繰ってみると、吉田茂、片山哲、岸信介、池田勇人、佐藤栄作、田中角栄、三木武夫、福田赳夫、大平正芳、鈴木善幸、中曽根康弘、竹下登、宮沢喜一、羽田孜、細川護熙、橋本龍太郎の元、現首相にお目にかかっている。鳩

山、宇野、海部、村山元総理とは残念ながら名刺交換をしていない。

わが故郷伊予の国は、明治政權樹立時に徳川幕府親藩が多かつたせいか賊軍扱いされたと言ひ伝えられ、内閣制度が明治十八年にできてから一人の首相も出ていない。

現在では官邸クラブや番記者が面倒臭いことを言うらしいが、昭和二十年代、三十年代は好きなままに質問できたから面白かつたし、政治家の人柄と本音が鮮明に出たように思う。

池田さんは正直人間

昭和三十七年六月二十日、池田

れたので、お決まり質問のあと「池田総理、あなたのご郷里、選挙区の尾道と四国の今治を結ぶ瀬戸内海大橋架橋に両方の地元は大そうな熱意で運動しています。建設に向けて調査費計上など考えられませんか」総理の所得倍増計画に大きく寄与する本州・四国の大動脈となります」と尋ねた。

うつむき加減の姿勢でじつと私の質問を聞いていた池田総理はキツとして顔を上げた。「君はなんという質問をするのかね。一国の総理大臣が自分の地元の橋、道路のために予算を付けるなど言えるか。私はふるさとへの我田引水の

予算を組むような考えは全くない。大橋には反対だ」。

紅潮した面持ちでしゃがれた声をかみしめるように、こう言い切った総理の顔をまじまじと見つめた。真正直な人だと思った。「貧乏人は麦飯を食え」と言ったのも本当かなと思った。

午後二時すぎからの会見は十五分ほどで終わった。しかし、そのあとが池田総理に最悪となった。NHKが午後三時、五時のニュースで松山発の総理談話を全国に流したのである。

夕刊に出る間もなく尾道市や周辺の島しょ部、陸地部の市町村長や関係者、選挙運動中の有力者、立候補者は頭にきたのだ。カンカンに怒った。

なんということを言うか、と思つたのは広島二区の有権者だつた。地元の要望に一顧だにせぬ政治家は選挙区から出ていけ、総理大臣なんかやめてしまえ、と激高した。その翌日から池田さんは故郷と東京でとつちめられ、選挙後、



松山市三津で沿道の歓迎に手をふってこたえる池田さん
＝昭和37年6月21日付愛媛新聞から

何か月も陳情攻めにあった。そして落城、予算を付けた。
一年ほど後、架橋取材で尾道市を訪ね松谷勝市長と会ったとき、市長が「松山での記者会見で火がついたんじゃないの。あんたが火つけ人じゃったのお。よう言うてくれたの」とねぎらつてくれて、

尾道水道を真下にした料亭で一席ご馳走になったのは笑止千万のことであつた。
その瀬戸内海大橋も三十五年後の平成九年九月七日、広島・愛媛県境の多々羅大橋の主ケタがつながった。平成十一年三月完成見込みである。

池田さんは真の政治家、真の国手としての正しい発言をしたのに、有権者にやられてしまった。

田中角栄さんと正反対のことを言い、実行した池田さん。ぶつけた質問が良かったかどうか、今も疑問に思う。六十六歳で亡くなる三年二カ月前のことだった。

はめられた？ 田中角栄さん
田中角栄元総理ほど、この記者クラブ会報に登場した政治家はいないのではな
いかと思うが、私も田中さん
のことをひとつ。

昭和五十八年の秋某月某日、東京・目黒の田中邸を訪ねた。当時の愛媛県知事・白石春樹氏に「田中先生に聞いてみたいことがある」と常々話していたところ、一緒に行くことになった。三度くらい名刺を交わし挨拶したことがあつて、記憶力抜群の人だから覚えてくれているかと思つたが、「どこかで会つたかな。新聞記者は嫌いだよ」と言う。

ロッキード事件の発端は昭和五十一年二月四日だ。ロスのロッキード本社からワシントンD.C.の支社あてに送られた小包便が、間違つて証券取引委員会事務局に配達された。それを開封してみたらロッキード社日本代理店あてのピナツ領収書かその写しが出てきたというのが始まりで、それが上院外交委多国籍企業小委で取り上げられたと聞いていたから、「この誤配小包を郵便法に違反して開封し証拠を取った」というのは、もともとどれかが何かの意図をもつて事件化しようとしたのではない

か、と素人でも考えられた。この点を田中元総理はどうお考えか聞いてみたのだった。

田中さんは三方ガラス窓のただっ広い応接室で白カバーのソファに身を沈め、目をつむつて私の質問を聞いていたが、終わつて「どうでしょう」と尋ねても口をへんの字に結んで正面を見つめたまま何も語らない。全身からオーラが出ていたようだった。この一件については見事な無言ぶりであつた。それから一年半たつて昭和六十二年二月、脳の血管障害で田中さんは倒れた。「私は無罪だ」と公判中に主張し続けた田中さんは最後のドンデン返しの見通しをつけていたのではないかと考えられてならぬ。話の続きが聞けず、歴史の真実が人知れず闇に溶け込んでいくとしていく。

いまいるお会員 一九二八年生まれ
愛媛県出身 松山商科大学卒 五〇年愛媛新聞入社 社会部長 東京支社長 広告局長 専務 同編集局長などを歴任
九〇年から社長 著書に「愛媛県政二十年」「来島どつく物語」

竹下登元首相が評したという

「怒る、すねる、いばる」が代名詞の橋本龍太郎首相に新たに「謝る(誤る?)」が加わった。第二次橋本改造内閣が九月十一日に発足して二カ月。佐藤孝行氏入閣問題で支持率が急降下し、発足間もない段階で「終わりの始まり」「政権末期の症状」と指摘されるような閉そく状況に陥るとは誰が想像し得ただろうか。

首相が風邪で体調を一時崩したのも一因だが、最高権力者である一国の首相を、新人議員を含め周囲がこぞって「激励」するという場面を見聞きした時は「ちよつと異様だな」と思わざるをえなかった。先輩記者に言わせれば「いやあ、(前首相の)村山(富市)さんなんかしょっちゅうだったよ」となるのだが。

首相番は新聞、通信、テレビ各社の政治部一年生記者十数人が首相の出邸から帰宅までの一挙手一投足をウォッチ。ふだんは官邸の執務室前で来客から首相とのやりとりを聞き出し、外出時には同行する。首相に質問ができるのは官

ワーキング プレス

——首相番——

フタが重くなった 「パンドラの箱」

▶ 南 谷 悦 郎
(共同通信社)

邸か国会の廊下での移動中に限られ、番記者一人が代表してぴたりと寄り添う。一日平均約十回、一回あたりの時間はわずか三十秒程度だ。外遊前や重要政策発表などを除いて、首相には定例の記者会見がないため、日常的に首相の考えを直接聞いたり、表情を読み取ったりする貴重な機会となる。

先の佐藤問題に関しては辞任にいたるまでのやりとりが二十回をゆうに超えた。気に障る質問には

「それで?」「ふーん」「何を聞きたいの」「ノーコメントというのがコメントだ」と連発し、視線すら合わさないこともしばしばだ。

得意の分野や機嫌がよい時などは、執務室前で愛用のたばこ「チエリー」をくゆらせながら、若い記者相手に長いときは五分近くも立ち話に応じる。番記者の間では「パンドラの箱が開いた」と表現するのだが、最近はこのいう光景もめっきり少なくなった。

佐藤問題に続き、省庁再編を目指す行政改革では、族議員の猛烈な抵抗にあつて前途多難。加えて十一月には石油卸商泉井純一被告から政界への多額献金疑惑をめぐり国会での証人喚問が予定されている。そのうえ、景気対策、行革会議最終報告、さらに社民、さきがけ両党の与党離脱も時間の問題とあつて、政権の命運を左右しかねない課題が山積している。

ある首相側近は、二〇〇三年を最終年度とする財政構造改革期間を引き合いにこう解説する。「米国だってブラックマンデーの後遺症に苦しみ、かつての繁栄を取り戻



橋本首相の心をのぞく貴重な30秒=共同

すのに十年かかった。日本も同じで、今は誰がやっても苦しい時期。橋本内閣は「種まき内閣」でかわない。もみを刈り取り、その果実を食べるのは別の内閣の時代だ。評価はその時に決まる」と。

十一月はロシア、サウジアラビア訪問、カナダでのAPECと外遊日程が目白押し。得意の外交で失地回復といきたいところだろうが、番記者にとっても動静に神経をとがらす日々が続きそう。

みなみたに えつろう氏 一九八七年入社
名古屋支社 社会部を経て 九七年四月から政治部官邸担当

「何が勉強になったかって、マスコミ対策ですよ。本番でカメラマンや記者と接触して臓器の入ったアイスボックスをひっくり返したら、どうなるか……」

十月中旬、東京での移植実施施設連絡会議の取材から帰る列車の中。乗り合わせた信州大学肝移植チームの橋倉泰彦講師に、臓器搬送シミュレーション（同月七日）の感想を尋ねると、真つ先に「マスコミの恐怖」を挙げた。

北海道で臓器提供者（ドナー）が出たという想定で飛行機やヘリコプターを乗り継いだが、札幌、名古屋と先々で囲まれた報道陣、その数にただただ驚かされたという。別の医師も「手術器材の上を飛び越えたり、われわれが乗ったタクシーが走れないほど前に立ちふさがったり」と報道陣に憤慨。松本市の信大病院の救急口でも、摘出チームが出入りする際、大勢の報道陣が取り囲んだ。

臓器移植は生命をつなぐリレーと言われる。その途中で、あのドタバタが繰り返されてはならない。報道陣も節度と礼儀を——と

改めて自戒した。信大から要請もあり、本番時には救急口に規制ロープを張り、手術室入り口は代表撮影にしようとして松本市記者クラブ（十五社）で申し合わせた。

論議を呼んできた脳死移植。臓器移植法が施行され、その再開第一号が、いつ、どこで行われるかは最大の関心事だ。生体肝移植七十五例以上の実績がある信大は、全国で二つだけの脳死肝移植実施施設。取材には力が入る。

——脳死移植——

生命のリレー “本番”に備える

▶ 小松恵永
(信濃毎日新聞社)

だが信大には、常設の記者室はない。記者クラブ幹事社の信毎と信越放送が交渉役となり、本番の記者会見や臨時記者室設置を申し入れた。各社さまさまな社内事情もあり、その上「できたら抜きたい」「抜かれることだけは避けたい」という当然の思惑もあり、クラブ加盟各社の希望をまとめるだけでも一苦労だった。

一方、信大側は当初「いつ使うか分からない部屋を空けておくことはできない」「病院内への設置は患者さんへの迷惑になる」と、クラブの要請に相当の難色を示した。再三の交渉で、何とか取り壊し予定の病棟の二部屋を臨時記者室として提供してもらい、病院内からクラブ負担で電話線を引き込むことで決着したのは法施行直前。「信大が言うのはいつも『前例がない』と先輩から聞かされていた通り、時間を取られ、消耗する交渉は取材以上だった。」

取材拠点と通信手段は何とか確保できた。後は実際の取材をどう展開するか、だ。信大は「あくまで日本臓器移植ネットワーク下の

移植手術機関」とし、ネットワークより先にドナー情報を明らかにしないとしている。どこで、どんな人がドナーとなり、意思確認はどう行われたか……。これまで松本で見えてきた臓器移植の「前半分」が脳死移植では伏せられることになる。信大情報だけを頼りにしても全体像はつかみにくいだろう。

厚生省はガイドラインで「移植医療の性格にかんがみ、臓器提供者に関する情報と移植患者に関する情報が相互に伝わることをないよう、細心の注意を払うこと」と義務付けている。倫理上、当然のことだろう。一方で、脳死移植への不信をふっしょくするためには情報公開も欠かせない。脳死移植の事実、どこまで突っ込み、どこまで明らかにすべきなのか。間違ひなく襲ってくる競争の渦の中で、必要十分なニュースを発信していく冷静な判断は……。悩みながらの取材が続くそう。

こまつ けえ氏 一九九四年入社 松本本社報道部で松本市政 信州大学担当

ワーキング
プレス

森が荒れている。黒く立ち枯れたブナ群、台風になぎ倒された杉、檜。神奈川も例外ではない。

神奈川の屋根「丹沢」に近い厚木、秦野、南足柄三支局の記者が「本社集合」を命じられたのは昨年十一月のことだ。

今年四月、神奈川県は県内の森の水源かん養機能を高める目的から「水源の森林（もり）づくり事業」を全国に先駆けてスタートさせた。総額三千二百億円。二十年に及ぶ新たな取り組みを検証するだけでなく、多様な生命が息づく豊かな森への道筋を提起できないか。それが企画会議のテーマだった。県政担当を交えた四人の取材班は、雪がちらつく山を登り始めた。

やせ衰えた森。川の水量も減っていた。「プロローグ」は元旦付から。無惨な姿を読者に伝えた取材班には、釈然としない感情が芽生えていた。「森林と向き合う人々に会ってみないか」。取材班の怒りにも似た感情の理由を探る「旅」が「第一部」となった。

東京あきる野市の人工林。「私、杉・檜を愛してる。山仕事は楽し

いよ」。森林ボランティアの若い女性が笑った。「鳥が鳴き、花に慰められる。こんなに幸せでいいのかなと、ふと思うことがある」。檜原村の林業家の言葉だ。前向きな笑顔とは裏腹に、取材班が知ったのは、林業と社会、木と人のつながりが寸断されつつある現実だっ

列島報告

— 神 奈 川 —

森林再生の道筋探る

連載企画「水を育む」

緒 方 秀 行

(神奈川新聞社
厚木支局長)

拡大造林は「やり過ぎ」と言えるだろう。

一方、山を放置している山林所有者の責任も軽視することはできない。しかし「子のため、孫のため」と山頂近くまで苗木を植えた先祖の労苦をだれが否定できよう。人工林や二次林の放置を余儀

なくさせた過疎化や国産材価格の暴落など「豊かさを追い求めた時代」のツケを、一人ひとりが自らの生活から反省する視点に立たなければ、森の再生は不可能と言えるのではない

か！

取材班の議論は、林業と環境を置き忘

た。

「広葉樹を切り払って、花粉を飛ばす杉ばかり植えるなんて」。水を多量に使用する都会側には、人工林、すなわち林業を否定的に見る傾向が根強い。確かに、国有林野事業や神奈川県をはじめとする自治体の累積債務をみても、戦後の

ていた「里山」へと誘導する北大

多様な林相の集合体が人を含めた生物を養うだけでなく、水源かん養を含めた森の公益的機能を培うという取材班の主張とも重なっていたからだ。

県の水源の森林づくり事業は、毎年約五億円を県営水道利用者の負担金で賄うが、県内世帯の約三割だけが「応益負担」する現状など、今後、改善すべき点は少なくない。水を育む森の創造は、林業の復活と直結していなければなら

ない。環境を守りつつ、木とともに暮らす習慣は日本人の誇るべき伝統なのだから。

(おがた ひでゆき)



牛山純一会員を偲んで

牛山との交友は、戦後まもなく、早稲田のキャンパスで始まった。

牛山が学生自治会の文学部委員長をしていた時、文学部祭に「ぶどうの会」を呼んだことがあるが、ギャラの一部を前祝い飲んでしまい、担当の久米明さんに大変迷惑をかけた。

後年、牛山が番組のナレーターとして、久米さんをしりば起用したのは、もちろん久米さんの卓越した技量を買ったことだろうが、牛山の胸中には久米さんに対するおわびの気持ちもいくらかあったのではないかと思っている。

大学を出て、牛山は開局したばかりの日本テレビに入るが、先輩のいないことをむしろ強味として、みるみる頭角を現す。

昭和二十八年から二十九年にかけて、造船疑獄に揺れる吉田内閣末期の政局をビビッドに描いた「第十九国会」は、牛山の処女作であると同時に、テレビで初めての政治ドキュメントの秀作だった。

当時不毛の時間帯だった夜十一時

ドキュメンタリスト精神

台を使つての「ニュースデスク」は、キャスターニュース番組のバイオニアだったし、米国NBCの人気番組「ミート・ザ・プレス」に範をとつた「日曜記者会見」、ポスト岸の政局では、宮崎吉政氏や今は読売新聞社長の渡辺恒雄氏ら派閥記者を動員しての本音の「記者座談会」（これは近藤日出造氏が「ガラは悪いが、こんな面白い番組は見ることがない」と絶賛した）。これらはすべて牛山のアイデアとプロデュースで目のみみた番組だった。

牛山はのち独立して「映像記録センター」を設立するが、親友・大島渚監督は「彼は生涯二千本の番組を作ったのではないか。私は彼と十九本の作品を作ったが、私が一度も喧嘩しなかった制作者は牛山さんだけ」と語っている。

個人D会員 毎日新聞OB

三宅 久之

牛山会員は日本のテレビドキュメンタリストの草分け的存在で、数多くの話題作を制作。また内外の作品の収集、保存、公開にも努め、こうした業績が評価され、八四年度日本記者クラブ賞を受賞しました。十月六日、肝不全のため死去。六十七歳。

山崎英祐会員を偲んで

個性的な人間の多かった読売新聞社会部の中で、山崎英祐さんは、もの柔らかで、温厚な人とされていた。新米記者が下手な記事を書いて、怒鳴るでなく黙って朱筆を入れるデスクだった。ちよつとおしゃれな優男。

一九一七（大正6）年、東京・荻窪に生まれ、三七（昭和12）年、上智大学新聞学科を卒業し、都新聞（後の東京新聞）を経て四〇（昭和15）年、読売に入った。南方特派員として敗戦をラバウルで迎えた。

戦後、ストに揺れた読売に戻り、社会部次長（昭25）週刊読売編集部長（昭35）編集委員会幹事（昭38）電子計算室次長（昭42）編集局次長（昭43）北海道支社長（昭45）

役員室・局長待遇（昭47）

定年退職・社友（昭48）という職歴だが、私にとって一番印象が深いのは、社会部デスク時代の山崎さんだ。

山崎デスクは、三十代半ばで、故原四郎社会部長（後に副社長・クラブ初代理事

21世紀まで生きたかった

長）のもと、ビキニ事件や組織暴力絶滅キャンペーン（いずれも菊池寛賞）で社会部が最も社会部らしく、読売が最も読売らしい時代だった。

山崎さんは、戦後、軽演劇に加わり、東京・浅草のフランス座の脚本を書いていたといつか言っていた。夜の銀座が好きだった。競馬にも詳しくあった。一度、痛い目にあったことがあるけれども、テレビのキャスター（NTV・イレブンPM）の草分けでもあった。五六（昭31）年、アフリカでシユバイツアー博士に会ったこともある。

山崎さんは、家庭では一切、仕事の話はせず、会社では一切、家庭の話をしなかったという。都会人らしいダンディズムだろう。

最後の言葉——「二十一世紀まで生きたかったなあ」。

名誉会員 読売新聞OB

（日本エッセイスト・クラブ理事長）

村尾 清一

山崎会員は七九年から九三年までの間にクラブの会報委員を二度、施設運営委員を二度務めました。大戦中流行語となった「銀輪部隊」、六〇年代に登場した「サラ金」という言葉は山崎会員の造語でした。十月十七日、膀胱がんのため死去。八十歳。

ク ラ ブ ゲ ス ト

清水 矩宏 農水省農業環境技術
研究所植生管理科長10.2 (木) 研究会
「外来雑草」
司会 浅井恒雄 委員 45人
出席

イチビ——。いまや、これが飼料用トウモロコシ畑のシンボルマークのようになっている。七年ほど前から顕在化し、セイタカアワダチ草がアツという間に一般に知れわたったように、農家でこの強害外来雑草の名を知らない人はいないと言う。

「生産への障害というだけでなく、こうした侵入雑草は既存の生態系を破壊する可能性もある」

輸入穀物にねらいを定め、二年前、茨城県の鹿島港に入った船一〇五隻を一年間手作業で調べた。約一、五〇〇種の雑草のタネが見つかった。イチビをはじめ急激にまん延したものがすべて含まれていた。侵入ルートは輸入穀物だった。特に米国からの大豆の中に多くの雑草のタネが混入していた。

10.6 (月) 記者会見
司会 宇治敏彦 委員 丸山啓子
出席 146人

では、これらの雑草がどうして飼料畑で多く繁殖するのか？原因は畜産農家のふん尿処理にあった。水際のサイロでの薫蒸も、加工段階のクラッシュヤーもスリ抜け、雑草のタネは濃厚飼料と共に牛の胃へ。そして、発芽能力を持ったまま大地へかえる。

「昔のように時間と労力をかけて堆肥にすれば、発酵熱で死滅するが、いまでは大量の生フンが畑にまかれ、その上に土がかぶせられる」

少人数で、多頭数を飼育しなければ生き残れない、自由化の下での畜産経営のあり方も背景にあった。

J・L・シプリアーニ大司教

フジモリ大統領の名の下にでもなく、橋本首相に頼まれたものでもなく、教皇庁、教会の代表として、この事件に参加したと述べた。

教会の立場は政治的なものを越えた崇高なもので、人間の尊厳と人命

の尊重が柱だと言う。また、所属する「保守」党派・オプスデイからの影響を質問された際には、党派とは関係なく「市民として決断した」とも答えている。

保証人委員会とはそもそも何だったのか。ますます複雑そうに思え、分からなくなる。結果として、大司教自身が心に傷を負ったのは確かだと思うが、大司教のスタンスは当初から次のように明快だった。

「MRTAの暴力的手段によって、彼らが主張する解放は達成できないということに分かるのが、自分の使命だと思い行動した。また、ベルー政府には、平和的解決により近づく別の選択肢というものを、この身で示したいという考えを持っていた」

松野 頼三 元衆院議員

吉田首相から始まって現在の政局まで、縦横に語った。随所に元政界「軍師」ならではのコメントもあった。手を抜くわけではないが、翌日(10・7)の朝日が「発言録」で、うまく扱っていたので、書いた記者に敬意を表して、転載させてもらおう。

10.6 (月) 懇談会
司会 菱山郁郎 委員 109人
出席

「橋本龍太郎首相は麻布高校、慶応大の後輩で、小さいころから遊びに来ていた。私はかわいい。でも最近はおかしいぞうだ。」

首相は世論の支持で行革を進めてきたが、佐藤孝行氏の辞任で内閣支持率は半減。行革の推進力も減ったのでは、と不安だ。ある人を通じて首相に「政治倫理で受けたマイナスは、政治倫理で取り返せ」と伝えたが、党三役がその大事なポイントを、ついでない。

もともと、今回の人事でも三役は自らの地位保全で動いた。(孝行氏の問題でも)責任の半分はある。その三役が、政治倫理の代わりに景氣対策を持ち出すようじゃいかん」

フランク・エルベ 駐日ドイツ大使

新大使として八月に着任した。司会のワグナー委員(シュピーゲル特派員)の紹介のように、大使はゲ

ク ラ ブ ゲ ス ト



10.9 (木) 記者会見
司会 W・ワークナー
委員 西村好美
通訳 出席 66人

ンシャー前外相の側近として、ドイツ再統一、ポーランドとの関係正常化に直接携わった。九二年、政策企画局長として連邦政府のアジア・コンセプトを策定し、九三年からは駐インド大使を務めていた。

ドイツ人は物事をまじめに受けとりすぎて、ブックサという癖があるのだが、と前置きしてから、「東京へ来て、日本の新聞、テレビのドイツ報道を見てみると、これが本当に自分の国なのだろうかと驚かされることがある」と。

旧東独統合の重圧、はかばかしくない構造改革など、確かにこのとこ

董建華会見から一週間後の急落

「七月以来、一、二度香港ドルをおとしめようという試みがあつたが失敗に終わった」。金融機関の透明性も自己資本比率も問題なく、今後ともドル連動制を続ける、と長官(10・17)。しかし、翌週の二十三日に通貨

ろのドイツ報道のイメージは暗い。困難な軍縮交渉を一つひとつ重ねて、再統一実現へ全力投球してきた当事者だけに、興行きや立体的性を欠く現象報道にはムツとくるのだらう。「ドイツは病める巨人ではない」と、現状を次のように説明した。

①上期の輸出は対前年三〇%の伸びで、下期の経済成長見通しは実質で三%。インフレ率は二%を切り、金利も史上最低。GNPは英国とイタリアの合計にまで達しようとしている。

②失業率は高いが、欧州内では六位のもの。しかも一年以内に約一〇万人減る見込み。社会保障の安全ネットが機能しているので、社会不安や経済的混乱も起きてはいない。

③七年間、毎年一、〇〇〇億ドルを旧東独地区へ移転した。これが大きな財政負担になっているが、こと

危機が香港ドルに波及、ちょうど一週間後の二十四日香港株急落。その影響で二十八日のNYはブラックマンデー(五〇八ドル)を超える五五四ドルの大幅下げ、そして翌日の反発——。とにもかくにも動きの速さに驚くばかり。

しになって改善も進んだ。が、これは今後も続く。なぜなら、インフラ整備だけでなく、これは欧州中央の安全保障投資でもあり、拡大欧州の統合を進めることが、ドイツの将来を確実にすることなのだから。

チャワリット・ヨンチャイユット
タイ首相

「イエスカノーかをはっきりさせなければいけない案件ばかりで正直大変です。よき友人でもあるタノン蔵相は、私にこう言うんです。首相三〇分で決断してください、と。七月二日の決定も大変でした。ド



10.10 (金) 記者会見 司会 那部吉正専務理事
通訳 池田薫 出席 166人

ル連動制から管理フロート制に変わったわけで、トラブルも悪影響も分かってはいたが、やらなければいけないということ、突き進んだ。

国民に、政治家というものは利己的な利害で国を動かしているのではなく、国と社会のために働いているのだということが分かってもらえれば、国として安泰で、これからもやっていけると思う。正しい決定を行い、正しい結果が生まれれば、私は評価されるだろう。しかし、間違った判断をして、間違った方向へ進んでしまえば、私が全責任を問われる。私はタノン蔵相などに、もう信じる道を進めよ、政治的責任は私がとる」と言っている。

右は、最後の質問に立ったブラジルの記者に対して、選挙をひかえ、国民に苦難を強いるという困難を承知のうえで、中南米諸国の経験に学びながら、あくまでIMFのコンディショナリティーを守っていくと語った後の発言——。

董建華 香港行政長官

二四七人の出席は、これまでのところ今年のレコードである。歴史的

ク ラ ブ ゲ ス ト



な返還から一〇八日目。董長官の初登場とあって、品定めといつては失礼だが、人物、人柄、力量を拝見しようという向きが多かったようだ。

「デモも一五〇回行われました」と長官。政治、経済システムだけでなく、人々のライフスタイルもそのままで、誇りを持って前進していると現状を語った。また、質問に答え、一国二制度について次のように述べ、自身の香港の将来についての自信の根拠を説明した。

「この制度を考え出したのは英国政府でも香港政府でもなく、中国である。基本的に中国の国益にかなうもの。香港での成功は、中国の近代化と改革の推進に貢献し、異なるシステムが共存できることの証になる。これは究極的に、中国のいわば全体としての再統一に結びつく」

同行記者（二九人）への気くばりもぬかりなく、大型バスをチャーターして、長官車の直前を走らせ、到着。会見後、九階の宴会場で同行記者だけのために、広東語で一五分のブリーフィング。合流した夫人と共にホテルへ向かった。

10・17（金）記者会見 司会 董長官
委員 通訳 西村好美 出席 247人

樋田 満 アジア経済研究所経済予測統計課長

八五年九月のプラザ合意後の円高ドル安を契機に、過去一〇年、東アジアは日本など諸外国からの直接投資により工業化が進み、高成長を続けた。これが次の一〇年も続くのか。計量経済モデルに基づく長期見通しの結果を、アジ研は八月に発表した。次の一〇年の東アジア諸国の年平均

経済成長は七・五%で、二〇〇五年の香港、シンガポールの一人当たり所得の合計は日本のそれを超えるという結果になった。（東アジア＝韓国、台湾、香港、シンガポール、マレーシア、タイ、インドネシア、フィリピン、中国）

オリブの木の下の連立政権

どうやって植え、育てたのか、そして、オリブの実をどのように収穫したかを話した。日本の気候を知らないで、この木が育つかどうか分からないのだが……。難局を乗り

樋田氏は、このプロジェクトのコーディネーターで、九月末、通貨危機に揺れるASEAN五カ国を回ってきた。そこで、現状と長期見通しを語ってもらった。



10.21（火）研究会
「アジア経済」
羽生健二委員
司会 出席 102人

R・プロディ イタリア首相

「政権、崩壊の危機 10・3」「共産党再建派が予算案反対 10・6」「伊首相辞表提出 左翼政権一年半で崩壊 10・10」「プロディ首相続投も 10・14」「プロディ政権下院が信任 10・17」。ある全国紙の見出しの推移である。

「辞表提出」が報じられた日は、休育の日で休日。が、タイ首相の会見

切り予定通り来日したプロディ伊首相。菅代表との会談で、中道左派連合をどうやって形成したかを説明した。果たして、東方のジバンクにオリブの木は育つのだろうか。

（10・23）

をこの日の午後にはセットしていたので、事務局のスタッフは出ていた。すでに日時も司会者も決まっていたが、これでイタリア首相の会見は消えたと思い、念のため大使館の報道担当・ペロナーチ一等書記官に確認の電話を入れた。すると「イヤ、まだ分からない。来週の火曜まで待つてほしい」との判断だった。結果は、彼の読み通りで、沈着で有能な報道担当にただただ脱帽。

混乱を収拾した直後だけに、会見での首相の発言は、EMU参加についても、国連の安保理改革についても、閣外協力の共産党再建派に対し



ク ラ ブ ゲ ス ト

でも、いずれも自信にみちたものだった。

10・23 (木) 記者会見 司会 宝利尚一
委員 通訳 長井鞠子 出席 136人

K・キンケル ドイツ副首相・外相



10.24 (金) 記者会見
司会 龍恵子・ルー
通訳 中島千穂・ボム
出席 115人

定期外相協議のため、三〇人からの経済人を伴い一泊二日の日程で来日した。官邸での橋本首相会談からすぐクラブへ。エネルギーの固まりのような外相は、京都会議、安保理改革などについて、次のような見解を示した。

京都会議 米国の出した数字はとてもしも小さなものでダメで、日本もいまの提案に何か新しい色をつけてもらわないと困る、と橋本首相にはつきり言った。第三世界のブレッツシャーもあるし、我々が一番世界を汚してきたのだから、工業国家の責任としても、京都会議を成功させなければならぬ。どうにもならない妥協の

場になるとは思っていない。

安保理改革 日独に加えて第三世界代表で常任理事国を拡大すべきだ。

第三世界の代表が決まらないなら、日独が常任理事国入りして、第三世界代表のため非常任理事国を増やすという方法もある。拒否権の問題はこちらからは持ち出さず、常任理事国の拡大で進もうと、日本側と話し合った。また、米国が分担金を減らした場合、日独でそれを負担するのは不可能だと思っている。

J・M・アスナール スペイン首相

三月の総選挙で、国民党党首として、約一三年続いた社会労働党を第一党から引きずりおろした。

東京での過密日程に疲れたのか、貴賓室では声もない感じだったが、記者会見場へ移ると一変した。

「あまりのハードスケジュールのため、昼食抜きで、ここへ来ています」と、ふん囲気をやわらげた後、評判通り冷静で緻密な政治家の本領を。

EMUについて「スペインの第一陣参加確実」を表明、世界的な株安



の影響もほぼ克服し、この一八カ月で株価も倍になっている。また、日本の安保理常任理事国入りについては「理解している」と語る一方で、現在の力関係にそう変化を与えず、かつ非常任理事国枠の拡大(スペインの関心事)も必要と付け加えることを忘れない。

「時間の節約にもなるし、内政批判もかわせるから」と笑って、日本側の質問を優先させた。そして、終了予定時刻になったところで、通訳なしで、同行記者から三問の質問を受け、終了。

10・31 (金) 記者会見 司会 吉村信亮
理事 通訳 大滝節子 出席 129人

E・S・ストロエフ ロシア連邦院議長(オリョール州知事)

クラスノヤルスク会談に対する、ロシア側のものすごい期待と意気込



10.31 (金) 記者会見
司会 舩原万里
通訳 舩原万里
出席 133人

みが、議長発言にも満載されていた。訪日目的は、日ロ間の沈滞している議会・議員レベルの関係修復のため。議員、同行記者など一行の規模は五〇人を超した。

「私どもはおそらく春を告げるつばめの役ではないか。つばめが来ると次に本格的な夏が始まる」。

一行の出発に際し、エリツィン大統領は次のように決意を表明した。と。「非常な熱意をもって会談にのぞみ、あらゆるアクチュアルな問題を、胸きんを開いて話し合う。そして、真の友好関係を確立していく」。

質問に答え、会談後に予想される成果として次の点をあげた。①通商経済環境の抜本改革②投資環境の整備・創出③二重課税防止協定締結④二国間の貿易高の倍増。そして、これらが実現すれば、両国関係は画期的な新段階に移る、と。

(岩崎)

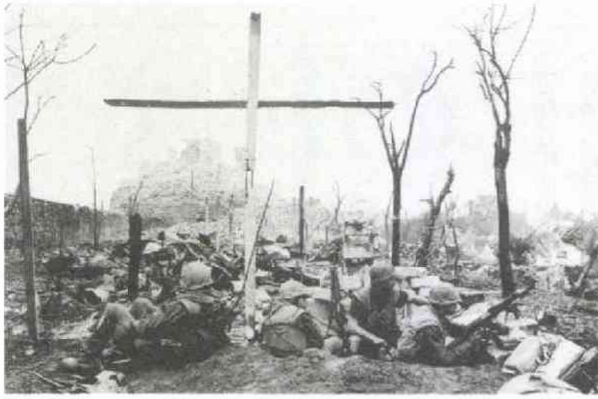
報道カメラマン遺作集

『レクイエム』

刊行に寄せて

大空 博

(個人D会員)



沢田 教一 ユエ王城東門の廃墟近くで戦う米海兵隊員=1968年 (Indochina Photo Requiem Project提供)

かつてヴェトナム戦争を取材したサイゴン特派員にとって、「古き良き時代」はあったのだろうか。確かに、あの頃は忘れられない。戦時下の異常な状況での毎日の仕事は、そして生活は、刺激的でスリリングだった。

しかし、そうした日々を「古き良き時代」と言ってもよいものか。

東京で開催中の『インドシナ写真展』開会式とシンポジウム「写真家は戦場で何を見たか」に出席のため来日したフォト・ジャーナリスト、ホースト・ファース氏は「いや違う」と断言する。

彼にいわせれば、「年月がたち、われわれ仲間が集う機会があったとしても、ヴェトナムの頃を懐かしみ、あの古き良き時代という話にはならない。なぜなら、古き良き時代など存在しなかった」からだ。

インドシナ戦争からヴェトナム戦争にかけての三十年間に、百三十五人のカメラマンが殉職、ある

『レクイエム ヴェトナム・カンボジア・ラオスの戦場に散った報道カメラマン遺作集』

大空博訳 集英社刊 定価七、一四〇円

『インドシナ写真展 戦場に散ったフォトジャーナリストたちの記録』

12月3日まで東京・千駄ヶ谷「フジタ・ヴァンテ ミュージアム」で開催中(木曜休館) 入場無料

いは行方不明になり、消息を絶った。

ファース氏は戦場取材で活躍し、いまもロンドンで古巣AP通信の上席編集者の職にある。そんな彼が、「ヴェトナムを離れ二十年以上たつが、あの頃を一日も忘れはしない。まして死んでいった仲間のことは」という痛切な思いで実現させたのが今回の写真展であり、日米同時出版の遺作写真集『レクイエム』である。かつての同僚で作家、ティム・ペイジ氏との気の遠くなるほどの根気と時間をかけた共同作業だった。

戦争終結から二十年以上も経過した今日、戦場に散ったカメラマンが残した作品は、ニール・シーハン記者が指摘するように、単なる記録ではない。「戦争の実相を、さらに先の世代まで伝え続ける」「歴史の映像」なのだ。

真の意味での「ヴェトナム報道」は、まだ終わっていないかった。

元サイゴン特派員の一人として翻訳作業というささやかな形ではあっても、今回の一連の企画に参加でき、彼らの作品に触れ得たことを、私は幸せに思い、感謝したい。

おおぞら・ひろし会員 読売新聞元サイゴン特派員。のちにパリ支局長、欧州総局長、編集局長などを歴任。

◆会議報告◆

第186回会報委員会

(10・13 小会議室)

十一月号の編集を協議したほか、明年一月号の『新春随想』の執筆者候補を決めた。

出席 住田委員長。田村、伊波、大空、埜邑の各委員。

第242回会員資格委員会

(10・13 小会議室)

読売新聞社の委員交代(三山秀昭氏から小谷直道編集局長次長)を報告した後、十一月一日付の入退会を審議し、理事会に答申した。

出席 斎田委員長。小田、北村、小谷、久保庭、伊藤、市村、熊本、村上の各委員。

第260回企画委員会

(10・22 宴会場)

今後のゲスト候補を協議したほか、新年の「経済見通し」研究会の講師候補を決定した。また、企画委員会が提案した「クラブ行事活性化方針」が九月の理事会で承認されたのをうけ、ディベート方式の会見などを具体的に検討することにした。

出席 神塚委員長。住川、宝利、島田、小林、春名、藤原、羽生、川戸、菱山、和田、森、ワグナー、シーグ、浅井、饗庭の各委員。

前田さんの会

クラブ草創のころ

去る十月二十一日、クラブ会議室で前田雄二さんを偲ぶ会が開かれた。前田さんとい

えば当クラブ創設の功労者で初代事務局長である。実際、前田さんの活躍なくして、現在のクラブ、さては今日のようなプレスセンタービルがあったか、はなはだ疑問である。

先日、これもクラブ、センター生みの親ともいべき江尻進さんの一周忌の会合で、たまたま前田さんの奥様にお目にかかったところ、前田さんが亡くなられて今年で満十三年になることが分かった。それをうかがって回りを見ると、もう前田さんと親しく仕事をともにした人も少なくなくなっていることに気づき、ご命日（二十日）を迎えて偲ぶ会を開くことにした。

前田さんは戦時中の『同盟通信社』特派員を経て（この時代の活躍は著書『戦争の流れの中に』に詳しい）戦後、新聞協会にこられたわけだが、もう高田秀二さん（クラ

ブ二代目理事長）のような『同盟』関係のお仲間もほとんどおられない。

日本記者クラブを見ても、前田さんが事務局長時代の三年間の在職者は池田洋子さん、今井千枝子さん、佐谷邦子さん（いずれも旧姓）、亡き小林武雄さんと現職の岩崎玄道総務部長だけである。

昭和四十四年、クラブが誕生したころ、もちろん現在のようなプレスセンターはなかった。翌年三月、帝国ホテル新本館が完成したとき、四階の「松の間」にクラブルームを創設（まもなく、今はない東館に移転）、六年五カ月に及ぶ帝国ホテル時代が続くのだが、今では八神代の時代とも言える当時のクラブを知る人も少なくなつたのではないだろうか。

記者会見は、ほとんどホテルの宴会場を借りて行われた。外国の賓客の接待、国際儀礼などに帝国ホテル、当時の犬丸一郎総支配人は、特別の理解と協力を惜しまれなかった。突発の会見に宴会場のやりくり、できるだけ安いプレス・ランションの費用など、このクラブの運営方式の基本はこの時以来のものである。今で

も続くクラブのフロア・マネジャーの帝国ホテルからの斡旋、その他の便宜供与などはこの草創期からの関係であろう。

クラブが発足すると前田さんはすぐ、クラブの入るビル建設に取り組まれた。といつても土地や金があるわけではない。新聞協会で建設の方針は決定していたが、以後の土地探しから選定、銀行めぐりから協調融資をうけるまで、さらにはビル運営の会社設立までの会員各社の調整などに全力を傾倒された。つぎつぎと新しい仕事に挑戦される前田さんの精神的な動きに、人としての生き方を教えられたのもそのころである。

株式会社が発立されると前田さんはプレスセンターに専務として専念されることになった。形の上では記者クラブの事務局を離れたわけだが、以後も理事として最後まで記者クラブの成長に力を尽くされた。クラブの一室で前田さんを偲ぶ会を開いた所以である。

個人D会員 上智大学教授

春原 昭彦

（元クラブ事務局長代行）

会員の著書（ご惠贈いただきました）

遺作写真集『レクイエム』

大空 博訳

（集英社 七、一四〇円）

『エルミタージュの綴帳』

小林 和男

（NHK出版 一、四〇〇円）

ゲスト
カード

▽大洋州・カリブ地域記者研修（フォーリン・プレスセンター 10・5・10・25）H・デュランド（ミラー紙ドミニカ）J・ヒックス（フィジー・タイムズ紙 フィジー）C・W・ステイア（デイリー・オブザーバー紙 ジャマイカ）E・コネ（パシフィック・スター紙 パプアニューギニア）R・L・イロガ（ソロモン・スター紙 ソロモン諸島）K・ビンダ（デワレ・タイド紙 スリナム）A・ウイルソン（トリニダード・ガーディアン紙 トリニダードトバゴ）

招待券

左記の招待券をご惠贈いただきました。お

礼申しあげます。▽朝日新聞社から「アンコールワットとクメール美術の千年展」▽坂本善三展▽片岡護会員から「新芸術展」▽大丸ミュージアムから「伊藤清永展」「小磯良平展」

◇個人D会員 (五十音順)

プロフィール

ハリウッド最高のドル箱俳優であるハリソン・フォードだが、この映画以上の役者冥利は今後あるまい。

米統合の象徴である大統領を演じるには知性と教養それにカリスマ性が必要だ。この大統領が強烈なアクションで全編覆うとなると大変な役である。—いわく、『アメリカ合衆国はテロリズムに屈しない』—

物語は狂信的なテロリズム・グループにハイジャックされた大統領専用機エアフォース・ワンを舞台に展開する。愛する妻と娘の命が国家的正義かの二者択一を迫られた合衆国大統領ジェームズ・マーシャル。彼の孤独な闘いが留守のホワイト・ハウスを巻き込み、予測不可能なストーリー展開を繰り広げる。息詰まる心理戦とノンストップ・アクションに思わず引き込まれてしまう。

「ザ・シークレットサービス」の巨匠ウォルフガング・ペーターゼン監督が勝負を賭けた

試写会

エアフォース・ワン

作品だが、大統領専用機という場面設定がユニークだ。

フォードは「インディ・ジョーンズ」「スター・ウォーズ」から「逃亡者」へと進み、「今そこにある危機」で心理的演技に深みを増した。今度はさらに上を目指しての大力演だ。

助演陣の中では女性副大統領を演じたグレン・クロウズに感心した。大統領不在での国家の危機に重責を全うする政治家として、抑制の効いた演技は見事だ。女性に副大統領をやらせるアイデアもさることながら、それにバシッと応える人がいるのもすごい。

ふと日本の総理を主役にしてどんな映画ができるのだろうかと考えた。どうかきたても面白くはないのだ。やはり「ハリウッド」「ハリソン・フォード」「米大統領」の組み合わせがドラマチックなワクワク、ドキドキを生むのだろう。

個人D会員 尾畑雅美



写真郎

写真 江角 和宏

(1995年産経新聞入社)
現在 写真報道局



呂比須がオーバーヘッドシュートを狙う
(11.1 韓国・蚕室五輪スタジアム)

「国威」?

いまだから四年前。ドーハでのW杯アジア予選、日本は対韓国戦1対0で辛勝した。その夜、私はソウルにいた。

テレビの衛星中継を見終わって、韓国政府のさる高官が「おめでとう」と握手を求めてきた。が、その顔はこわばっていた。

翌朝の韓国紙には「国辱」「日韓併合以来の屈辱」の大見出しが踊っていた。なにしろバルセロナ五輪のマラソンで金メダルを獲得したときも、優勝したことより日本に勝ったことの方がうれしい、と喜ぶお国柄だ。

さて、98年W杯アジア最終予選。がけつぷちに立たされた日本は、十一月一日の対韓国戦2対0で快勝、辛うじて希望をつないだ。

四年前、あきらめかけていた韓国が出場権を手にした奇跡を思い出す。勝敗は時の運に左右されることもあるが、運もツキも実力のうち。対UAE戦ではツキにも見放された。実力を出し切れなかっただけの話なのに、試合後のサポーターの騒ぎは見苦しかった。

たかがサッカーと割り切ってしまうは、もつと気軽に楽しめるはずだ。「勝つしかない」とか「国威をかけて」と肩ヒジ張ると疲れるばかりだ。安手のナショナリズムは願ひ下げにしたい。

二〇〇二年W杯日韓共催の行方が心配でない。

(和田千年)

九八年度「日本記者クラブ賞」

候補者を二推薦ください

◆取材、報道、評論活動などを通じてジャーナリストとして顕著な業績をあげ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を、明年一月三十一日（土）までに候補としてご推薦ください。

◆「選考基準」は左記の通りです。

①現役ジャーナリスト個人に与えられる賞である。（現役という意味は現に活動しているということ）故人は対象としない。

②活動が長期にわたるという意味での「敬老賞」でもなく、日の当たらない困難なところで活動しているという意味での「風雪賞」でもない。

③スクープ賞ではなく、特に最近数年間の業績が顕著であることが重視される。

④その存在および業績が、ジャーナリズムの活性化と成熟にインパクトを与えるような個人を顕彰する。

◆会員およびプレス会員社に属する方々が候補有資格者です。

◆推薦者は所定の用紙に記入し、推薦理由、参考資料を添えて提出願います。

◆詳細につきましては、事務局へお問い合わせ願います。

△法人会員代表変更▽

報知新聞社

（新）堀内 稔 代表取締役社長

（旧）山北 博司

東奥日報社

（新）佐々木高雄 代表取締役社長

（旧）岩渕 義弘

千葉日報社

（新）土屋 秀雄 代表取締役会長

（旧）鶴岡 清

ロイタージャパン

（新）ウイリアム・スポサト 東京支局長

（旧）トーマス・トムソン

UPI通信社

（新）ピーター・ケニー 東京支局長

（旧）グレン・デイビス

日本放送協会

（新）海老沢勝二 会長

（旧）川口 幹夫

東京メトロポリタンテレビジョン

（新）石田 文夫 常務取締役

（旧）堀口 政次

九州朝日放送

（新）松本 知則 代表取締役社長

（旧）涌井 昭治

会員現況 法人会員 一五二社 基本会員 八一

八人 個人会員 一、八二五人 法人・個人賛助

会員 五八社 一八六人 特別賛助会員 五五人

名誉会員 一四人 計 二〇九社 二、八八八人

11月26日に秋のゴルフコンペ

第七十回ゴルフ会を左記のように行います。

日時 十一月二十六日（水）午前八時集合

場所 戸塚カントリー倶楽部

定員 三十二人（申し込み先着順）

会費 五千円

参加ご希望の方は、事務局の小橋（電話〇三五〇三一二七二）までご連絡ください。

計報 堀健三会員（東京新聞OB・76歳）が十月

六日胃がんのため、牛山純一会員（名誉会員・67

歳）が同日肝不全のため、山崎英祐会員（読売新

聞OB・80歳）が十七日膀胱がんのため死去され

ました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

十一月の行事（4日現在）

20日（木）午後2時～3時 ストヤノフ・ブ

ルガリア大統領記者会見

（行事案内電話）〇三一二七二〇三一二七六四

会報委員会

委員長 住田良能

委員 田村欣也 伊波新之助 大空博

連 梶邑義道 和田千年 塚越喜昭

連絡 長谷川 河野

（電話）〇三一二七二〇三一二七二二

（FAX）〇三一二七二〇三一二七二二